

# 直腸肛門内圧検査を導入しました

平成 22 年 4 月より小児外科の先生方、外科外来スタッフ、泌尿器科外来の方々のご協力で直腸肛門内圧検査を導入することができました。「肛門のしまり具合」は今までは便が漏れるとかトイレに間に合わないなどという臨床症状や診察医の肛門指診に頼っていましたが、直腸肛門内圧検査により肛門のしまり具合を数値化することで正確かつ客観的に評価できることとなります。今回は肛門疾患を診断し治療するうえで欠かすことのできない肛門を締める機能と直腸肛門内圧検査について概略を説明します。

## 直腸肛門内圧検査器具

器具はスターメディカル社製直腸肛門検査キットで、測定法はマイクロランスデューサー法で行います。肛門内に挿入した圧センサー(マイクロランスデューサー)(図1)を一定の速度で引き出す自動引き抜き器(図2)、モニター・プリンターから構成されています(図3)。



図 1

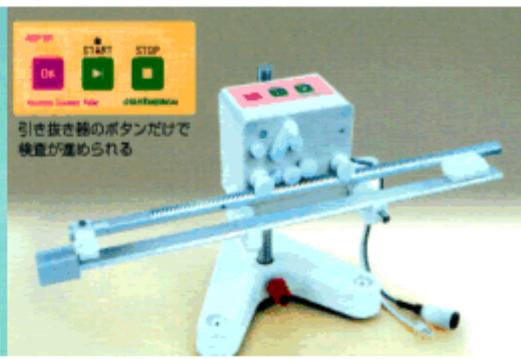


図 2 自動引き抜き器

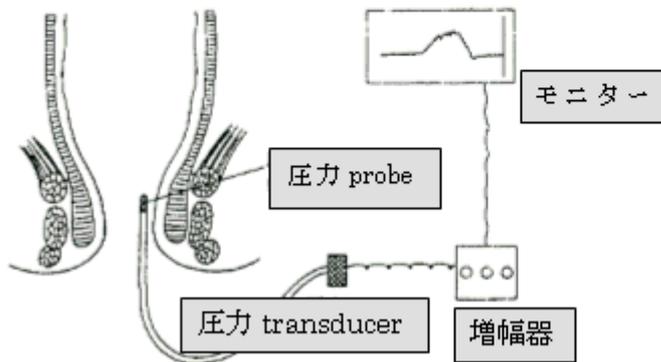


図 3 直腸肛門内圧検査キット

前処置は直腸と肛門内がある程度空虚になっていればよいので、1 時間くらい前に排便を済ませるだけで十分です。普通左側臥位で行い、ゼリーを塗布した細いセンサーカテーテルを肛門内に挿入するだけであり、痛みは全くなく検査時間は約 15 分程度です。

## 主な検査項目

1. 最大静止圧: 無意識のうちに肛門を締めている力であり、この力が低下すると下着汚染などが生じます。内肛門括約筋は平滑筋であり、睡眠中に外括約筋が弛緩状態でも持続的に収縮しており一定の圧が保たれています。最大静止圧の 80% は肛門内括約筋の働きを反映しています。
2. 最大収縮圧: 力いっぱい肛門を締めた時に得られる力であり、この力が低下するとトイレに間に合わなくなったり、ガスが漏れたりします。横紋筋である恥骨直腸筋と外肛門括約筋の収縮力を反映しています。
3. 直腸肛門反射: 直腸下部に便がきて直腸が伸展されると反射的に肛門が弛緩し便が排泄される仕組みであり、この反射が鈍ると便意があっても便を出せない症状が出現します。直腸内でバルーンを膨らませて肛門内圧が下がる反応をみます。

## 波形分析と評価

肛門の狭さ、ゆるさ、肛門内の腫れの大きさと形、その幅などを上記数値に加え波形により知ることができます。下記に主な波形を示します(図4)。

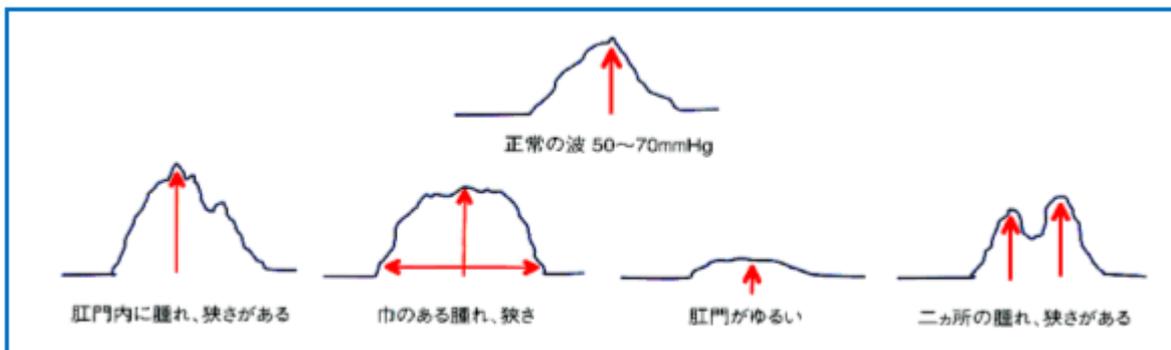


図4 内圧検査の波形分析でわかること

## 対象疾患

1. ガスが漏れる、便が漏れるなど肛門の締まりの悪さを訴えるとき
2. 残便感や排便困難を訴えるとき
3. 痔核、裂肛、痔瘻などで便の出にくさを訴えるとき
4. 直腸脱など肛門がゆるく脱出するとき
5. 直腸痛があり便の出にくいとき
6. 肛門の変形や括約筋損傷が疑われるとき
7. 肛門狭窄があり排便困難のあるとき
8. 裂肛や痔瘻の術後機能障害が疑われるとき
9. 肛門異臭症や肛門神経症で肛門の緩さを気にするとき

直腸肛門内圧検査は毎週月曜日午後5時の肛門専門外来の後に予約制で行っています。近隣の肛門疾患を治療されている先生方で直腸肛門内圧検査を依頼される場合は気軽にご相談ください。